

巻頭言

留学生センター長 松岡 弘

留学生センターが学内共同利用教育研究施設として本学に設置されてからはや2年が過ぎた。センター設置にともなって始まった「日本語研修コース」も現在第4期目に入り、昨年からは留学生相談部門に「留学生相談室」が開室した。このように留学生センターの活動が軌道にのり、センター関係教員の教育・研究の成果も少しずつ蓄積されてきたので、「一橋大学留学生センター紀要」として世に問うことにした。同時にセンターの年次報告も行うことになったが、本号は創刊号なので、「年報」欄にはセンター設置の1996年5月から97年度までの約2年間の記録を載せ、また特別記事として留学生センター設置前の10年間の日本語教育ならびに留学生相談の歩みを振り返った。

ところで、「留学生センター」は98年6月現在、すでに全国28の国立大学に設置され（2つの「留学生日本語教育センター」を含む）、いずれも、対外的には研究留学生のために半年の日本語教育を実施する機関としての役割をもち、学内的には一般の留学生のための日本語・日本事情教育や生活指導を行うセンターであるという点で共通している。前者について補足すると、昔は大阪外国語大学1校に集めて実施されていたのが、今では全国28の大学に分散して行なわれるようになったということである。

従ってまず、留学生センターに課せられているのは、分散方式となった6か月の日本語予備教育（本学では「日本語研修コース」と呼ぶ）をきちんと行い、期待される日本語力を身につけさせ、本学も含めた近隣の諸大学の大学院に送り出すことである。実はこれがなかなか大変である。周囲から期待されていることと現実にできることとのギャップは、分散方式になったからといって簡単に埋まるとは限らず、むしろ問題点がそのまま、28のセンターにばらまかれたという面がないでもない。しかしながら、分散方式に変わってきたのはそれだけの理由や利点もあったわけで、少なくとも各センターでの教育成果が1校集中方式時代と変わらないようでは意味がない。そうすると、社会科学の総合大学に設置された本センターの目指すべき方向あるいは役割は、おのずから明らかであろう。

次に、学内の共同利用施設としての役目であるが、これは本学における留学生の増加や一般の日本語授業の受講者の急増から考えてもますます重要になってきた。こうなってきたのは、学部レベルでは国費留学生、日研生、交流学生の増加があり、大学院レベルではこの2年の間に次々と誕生した、言語社会研究科、地球社会研究専攻（社会学研究科）、アジア・太平洋国際関係プログラム（法学研究科）を含め、それぞれの研究科が留学生を積極的に受け入れるようになったからでもあるが、これについては、本学はセンター設置以前から、日本語教育の面でも留学生相談の面でも適切に対応してきたことを誇ってよいのではないかと思う。

例えば、留学生の生活・修学上の相談については、センター発足に先立って国際交流会

館主事や各学部の留学生専門教育教官が協力して築いてきた全学的なアドバイス・カウンセリング体制があり、それがそのままセンターの留学生相談部門の中核となった。また、交流協定校との相互交換留学が全国的にも盛んになっているが、本学の場合、後援会等の援助による学生の海外派遣制度が10年近く前からスタートしていて、そのためのノウハウや実績は確実に蓄積されてきている。こうしたことを背景にして留学生センターが設置され、長い間待たれていた学内共同利用教育研究施設としての役目を、同時に充足した留学生課と協力しながら果たすことになったわけである。

本センターは全国28のセンターのうちの一つにすぎないが、いざ誕生するとなると、それなりに産みの苦しみがあった。だが、学長をはじめ全学の理解と協力があつて非常に幸運なスタートを切ることができたというのが私の率直な感想である。例えば、日本語の予備教育を始めるには定員の教員数だけでは十分に対応できないという懸念があつたが、これに対しては4学部から様々な形の人的支援が得られたことを、感謝の念をもってここに記しておきたい。

と同時に、センターが発足するまでの10数年の留学生教育において、教職員の地道な取り組みと努力があつたことも忘れないようにしたい。特に山澤逸平教授（経済学研究科）は早くから日本語教育を含めた学内の留学生教育を強力に推進された。多摩地区大学の土曜日の日本語課外補講は山澤教授のアイデアで実現・運営されたものであり、交流協定校間の交換留学も教授が先鞭をつけ、それが後の飛躍へのステップとなった。また、当時の学務課の職員が留学生業務をこなしながら、休日も返上して留学生の悩みの相談にのつてきたことも忘れてはならない。こうした方々の献身的な働きがあつて、留学生のための教育や生活相談、そして留学生と周囲の人々との交流が成立したのである。留学生センターができ、留学生課が誕生したことは確かに喜ばしいことであるが、規模が拡大し、制度が整うことが、教職員が留学生一人一人と直接向かい合う機会を希薄化する結果にならないよう、常に自らを戒める必要があろう。

さて本題に戻って、一橋大学留学生センターの目指すべき方向であるが、日本語教育に関しては「社会科学のなかの日本語教育」であることはまず異論のない所であろう。幸い本学の留学生センター教官は教授会のメンバーでもあるから、今後とも学部や研究科との協力関係を大切にして、一橋大学に相応しいものを創り、育ててゆきたいと思う。

また、留学生相談部門を中心とした留学生と日本人学生、および地域社会との連携は、これこそ真の国際交流であり、これからもこの分野の牽引車であり続けたい。

最後に、改めて言うまでもなく、研究と実践は車の両輪である。本号に見られるような理論的・実践的研究は、さらに積極的に押し進めていかなければならない。

この2年間は一橋大学全体の変革の時期であつたが、それと時を合わせて留学生センターが勢いよく船出し、未来の航路を開く改革事業にともに参画できたことを心から喜び、巻頭言とする。

1998年7月1日